

## 随想

### 名寄・道北の昔、そして今のあれこれ

— 明治の偉人達を偲ぶ — その(2)

名寄信用金庫初代理事長 島田要一さん親子のこと

上川北部医師会 会長 中 村 稔

島田要一さんは私の父と同年代で昔から親交があり、特に名寄市立総合病院に赴任してからは私ばかりか息子豊も孫の様に可愛がって頂いたのである。その後、私が近所で開業してからは度々往来してお話する機会があった。島田さんは、旧旭川中学（現旭川東）、秋田鉱山専門学校、東北大学工学部鉱山学科を卒業したが、「他人のメシを食ってこい。」と言われ足尾の古川鉱業に就職、5年後に父の許に帰ってきた。父千代松さんは、北海道の砂金王と云われ、砂金・砂白金仲買人の大物であり、特に砂白金では道内の90%を取り扱った。砂白金は、プラチナ、イリジウムなど白金属の合金である。

「この道北一帯は、金、砂白金、砂金が豊富だね、僕も随分あちこち歩いた。宗谷の浜頓別、中頓別、歌登、幌延の間寒別、温根別や幌加内、深川の鷹泊では砂白金が多かった。特に父は砂金に比べて極端に安くて売れにくい砂白金に拘っていた。そんなこともあって、鉱専時代からオーストラリアから経済雑誌をとって、日本にも輸入量が多かったタスマニア産の白金の価格を父に報告した。それをもとに父は東京や関西の市況や消費動向を探り、それに見合った生産量を決めて価格を安定させ、極端に安かった北海道の砂白金を10年間で約15倍にして、生産者や出入りする仲買人の信用を高めていった。昔、池田の健さん（名寄4条薬局、池田健氏）から聞いたことがある。東京薬専の口答試験で、“名寄の特産物は何か”と聞かれ、戸惑っていると、“君、イリジウムだよ、知らないのか”と言われたと言う。名寄では取れないのに、砂白金の産地と専門家にも思われてい

たんだね。」千代松さんが“イリジウム王”と言われた由縁である。

「僕もね、小学校5年の夏休みに初めて父に連れられて、和寒を経て幌加内に行った。着物でワラジを履き、背丈以上の草の茂った険しい山道を熊除けのラッパを吹きながら歩くんだった。深名線がなかったので、鷹泊、沼田、北竜の生産地を廻って深川から漸く汽車に乗れた。辛い旅だったが、自然に接しているのは結構楽しかった。その時、子供心に父の職を継ごうと思った。砂金では歌登のペンケ沢が有名だった。最盛期には千人以上の山師達が野宿し、飲食店も沢山あった。山師達の一部は嶺を越えて中頓別や浜頓別に移っていった。金は余り扱わなかったが、雄武や下川にあった。」

私は美深町に生まれ育ち、子供の頃から山乙女釣りに親しみ今日に至っている。道北一帯で5万分の1の地図にある河川は殆んど源流まで遡行したと思っている。

下川町のモサナル沢10kmには、明治時代に開発された金鉱山の坑口が二つ残っており、付近にはズリ山の跡がある。一の橋宮林署（現在は下川宮林署に統合）の担当区主任によると、モサナル沢は谷も険しく激流だったので、岡の様な分水嶺で隣あっている然別沢に運搬されて流送されたと言う。又、サンル川の御車右股沢では10年前まで金鉱山が経営されていたのである。

雄武町の音稲府川流域では、一の沢付近に明治時代に開発された金山の坑口が残っており、源流には坑口や集落の跡が草木のなかで朽ち果て、散在しているし流域の各地で運搬に使用した軌道の橋桁の一部が残っている。

歌登のパンケ沢の源流はポロヌプリ岳。美しい山と清流である。現在は禁魚河川、山師達はポロヌプリ岳を越えて中頓別の尻無川（鍾乳洞のある沢の本流）で砂金や金を探した。橋の上流1.5km付近には、原始的ではあるが最も効率よく砂金を採取するために造られた木の枠で囲まれた樋が残っている。山師の一部は中頓別に残り定住したが、当時の道具一式が資料館に展示されている。又街おこしのため、砂と砂金一粒と小さな道具一式が入った箱詰めが売られていた。

ポロヌプリ岳の隣は珠文岳、山師達は珠文から宇曾丹川に砂金を求めた。宇曾丹川は、背景に峻しい連山、美しい様々な川石と変化の多様な流れ、道北一の溪流の名に相応しい清流である。ここでは毎年夏休みの期間に体験砂金掘りが開催され多数の親子が参加している。

「昔ね、昭和の初め頃に東京の地金屋が砂金や砂白金を扱った八畳間の畳を売ってくれとやって来た。当時特上で一枚七円五十銭だったのに全部取り変えて、更に四百円おいて帰った。所が便りが来て、出てきたイリジウムや砂金で 七百二十五円十三銭になったと言う。僕達もお人好しだったんだね。」

千代松さんは、昭和12年町立社会病院設立にあたり町議会で“町立社会病院設置の建議案”を緊急動議として提案して満場一致で賛成となった。しかも上川北部はもとより、宗谷や網走、留萌の一部に及ぶ18ヶ町村の賛同を得てのものだった。道北一帯に顔と名前の売れた千代松さんの最後の大事な仕事だったばかりでなく、町立社会病院は発足時から18ヶ町村16万人の住民にとって“地域センター病院”だったのである。

やがて昭和14年、千代松さんは没し事業を継いだ。昭和15年“白金等統制規則”が施行され、全国で13人、北海道では只一人指定を受けた島田さんは、深川の鷹泊に帝国砂白金開発会社雨竜鉱業所を開設した。幌加内に“帝白”と地名がある。かつて帝白で働いていた人達が戦後に開拓のため集団で入地した所である。

島田さんは昭和21年1月に名寄に帰ってきた。「名寄に帰っても只無力感ばかりで何もする気がなかった。これを見てよ。」それは砂白金の分析や砂金を金塊にするための手造りの冶金部屋で

あった。「何もすることがないので、ここで当時持っていた砂金を金塊としてね、これがそうだよ。」かなり大きな金塊だった。

やがて、昭和26年に名寄信用金庫が設立されるや、経歴や実績、人柄が買われ請われて初代理事長に就任され、十分にその手腕を発揮して信金の土台を造りあげたのである。「僕は若い頃から野球が好きでね。早速信金に野球部を造った。」名寄野球連盟が結成されると推されて会長に就任、在任中は数多くの道大会や東日本大会を主管開催されて、野球の底辺拡大や振興、大きな大会開催による市経済活性化に大きく貢献されたのである。

私が体協副会長の時推薦者となり名寄市文化賞を受賞されている。かつての信金の軟式野球チームは名寄の最強軍団で度々全道大会でも活躍した。因みに、現在の理事の一人である磯部正さんは名高、信金のエースであった。余言ながら、田原靖久理事長は若い頃から島田さんの秘蔵っ子であり理事長就任以来、業績を大巾に上昇させているが、久保田宏病院長と名寄高校同期、それ以来の親友とのことである。

島田さんの夢は道北の砂金について著作することであった。「最近砂金に関する本がよく出版されている。中にはわざわざ聞き取りや資料を持って来る人もいたが、殆どは自分の狭い体験をもとにしてコピーライターが書いたものが多いと思われる。本格的なものを書こうと少しづつやっているよ。」

しかし、理事長時代は多忙を極め、退職後は親族の会社再建のために奔走している間に罹患され、その夢を果たせぬまま平成2年9月11日病没した。

“もし”が許されるならば、そこには単に砂金に留まらない道北の大正・昭和に亘る巾広い歴史が克明に記載されていたであろう。